神社 de ままマルシェの背景・想いなど

（2021.07.02 現在）

デザインが生まれた理由/背景

出産を経験した女性の約 15%が「産後うつ」を発症すると言われ（※1）、さらに新型コロナ禍において何らかの精神的・身体的悪影響のある育児中の女性は 7 割にも及ぶとの調査結果がある（※2）。毎年 3 千人近い新生児が誕生する越谷市は東京のベッドタウンであり、土地開発と他地域からの転入も増えている。周りに頼れる家族や知人のいない母親が少なからず「育児中の母親にしかわからない喜びや悩み」を抱え孤立している。 また産後も継続して就業する女性は約 4 割にとどまる。自分らしい生き方と家庭の両立は社会課題だ。 母親たちはこのような悩みの外部発信や、ともに支えあう方法やつながりかた、気持ちの余裕を持てずにいる。育児中の母親たちが自分らしく生きられるために、今、苦しい想いを救えるような「応急処置」と、これからを見据え「社会とつながれる仕組み」づくりを、自らも子育てする母親であるメンバーたちができる方法を考え、実現したマルシェである。

※1　公益社団法人日本産婦人科医会　妊産婦メンタルヘルスケアマニュアル 2017 年 7 月

※2　江崎グリコ株式会社コロナ禍における子育てに関するパパママ意識調査

https://www.glico.com/jp/newscenter/pressrelease/31769/　2020 年 9 月

デザインを実現した経緯とその成果

取り組みのデザインは「ママたちのママたちによるママたちのためのマルシェ」である。発起人が初めて育児に直面した時、母親が育児を理由に孤立せず安心できる場所や、自分らしい生き方を諦めないでいい地域社会づくりをしていくことの必要性を感じた。古くから安産祈願の社として地域に根付いた神社の女性宮司とのつながりもあり、「母親バリアフリーの実現」を意識しつつ第一歩としてマルシェを実施した。実行委員会には、いずれも子育て中の母親たちがスキルや思いを持ち寄って参画する。 母親層が多い出店者は、できるだけ多くの経験機会を提供できるよう毎回選定や入れ替えを行う。来場者が出店者に、出店者が運営メンバーに、といったような母親たちのかかわり方の変化も見られている。マルシェへの反応は高く、このような場を希求していた母親たちの掘り起こしとつながりづくりが実現しているほか、企業・商店街・学生等地域との関係も深化している。

「神社 de ままマルシェ」の特徴

「民間が主体」一般的に母親向け支援イベントは行政主導が多いが、当取り組みは資金調達を含め民間主体での取り組みとなっている。

「母親が中心的に企画運営」育児中の女性ならではの喜びや悩みを共感、共有できる母親層

が中心となって企画運営している。日中だけではなく日常の育児が終わった夜にオンラインで会議を重ねるなどしつつ、主体的に楽しみながら参加している。
「多様な参加を可能にする余白」“共感、育成、自立＝自分らしい生き方の実現”という考え方のもと、母親たちがかかわりたい方法や切り口で参加できるようにしている。
「地域内での連携」運営の応援は学生、マルシェの備品は商店街、資金は企業賛助、アドバイザリーとして保育園や小児科医とも連携するなど、地域との関わりを意識している。
「ＳＮＳ活用」平素の情報発信だけではなく、悪天や新型コロナ禍でマルシェが中止になろうと、場をＳＮＳに移すなどして場づくりを実践している。

これまでの実績

２０１９年６月～２０２１年５月に１５回開催（第１５回は荒天のためオンライン開催）。来場者のべ４．５千人、出店者のべ３９３組、協賛企業のべ４２社。インスタグラムフォロワー数約１．３千人、公式 LINE 登録者５２０人、公式ＨＰページビュー約７万件。回を重ねるごとに数字が積みあがっている。新型コロナウイルスの影響でマルシェを中止した R3 年 1 月はインスタライブでの公開実行委員会を実施。出店者のみならず普段は来場者である母親たちからもリアルタイムで意見や要望を募り、その後に開催したマルシェでは実際に実現した。また、普段の生活で母親たちが困っていることについても意見を募り、越谷市へ要望を伝えるなど、敷居が高いと思われがちな行政とのやり取りも実施。行政からも呼応する形で出張育児講座など連携が始まっている。 数字には表れない来場者や出店者から寄せられる喜びの声もまた私たちにとっての大切な実績と考えている。

主宰者の想い

たった一人の「あったらいいな」から始まったこのマルシェに、今では地域から多くの共感が寄せられている。「ママの居場所」にこれだけニーズがあるのに、なかなか普及しない。当事者にしかわからないことの多さ、それを伝える余裕すらない背景がある。ただ、「同志」が少しずつ力と知恵を出し合えば、自分の居場所や生き方に近づくことが不可能な話ではないと、証明できたと思う。 近未来、このような場がメディアに取り上げられるまでもなく、日常の風景に馴染んでいるような社会になることが理想だ。幸せなはずの育児を純粋にもっと楽しめる社会であってほしい。母親のイキイキとした姿や人、地域とのつながりは子どもたちの成長の過程やこれからの地域のありかたにおいて非常にプラスになると考えている。 私たちの取り組みが「グッドデザイン」であると認められることが、どれだけ多くの女性たちの励みになるかと想像するだけで、非常にワクワクする。

以　上